



## あいさつは何のために

副校長 角皆 裕文

「つのがい・・・せんせいだよね！」

異動した学校での子どもたちとの出会いの場面はこの年になっても緊張します。「どんな子たちなのだろう・・・」「この人なんだろう？とか思われるんじゃないか・・・」

着任してから1週間。進級した子どもたちを迎える準備を終えた小雀小学校の校舎には、気持ちのよいあいさつの声が響いていました。職員室にいと廊下で職員や保護者とすれ違う子どもがあいさつする声が聞こえ、校内を歩けば、すれ違う子が「こんにちは！」と、気持ちよく声をかけてくれます。中には私の胸に下がる名札を瞬時に見定めて、冒頭のように声をかけてくる子もいて、とてもうれしく思いました。

「今の子どもたちはあいさつをしなくなった」

様々な地域でよく聞かれる言葉ですが、そんな言葉を聞くたびに、私は「その前に大人はどうだ？」と自問してしまいます。さらには「子どもがあいさつをしてくれない」という声まで聞こえてくると、なんだか違和感を覚えます。

そもそも、あいさつは何のためにするのでしょうか。これについては様々な考えがあると思いますが、一つの側面として、あいさつは「自分のため」にするものだと思います。

あいさつは「私はここにいるよ！」「今日も元気だよ！」と、属する集団に対して自分自身をアピールする役割もっています。なぜアピールすることが必要なのか。それは、集団に災難が襲ったときに「集団の一員」として助けてもらう必要があるからではないでしょうか。もし、あいさつが人間のこうした根本的な生存欲求に結びついているとしたら、あいさつをするべき時にできなかった気持ち悪さも、されるべき時にされなかった気持ち悪さも、説明できるような気がします。

そう考えると、子どもの見方も変わってきます。今、目の前であいさつができた子は「本来の欲求を素直に表出できた子」。あいさつのできなかった子は「なんらかの理由で素直に表出できなかった子」。そういうことならば、大人はその子の背景に着目して寄り添うことができるはずですが、いずれにしても、頭ごなしに「ちゃんとあいさつしなさい！」という指導は、姿を変えていくでしょう。

さて、話を小雀小学校に戻すと、私のここまでの印象は「よくあいさつのできる子どもたち」。その裏にはきっと、あいさつのできる大人たちがいるのでしょう。それは言い換えれば、子どもたちが人間として自然な姿で成長できる環境が、地域で保たれているとも言えるのではないのでしょうか。

生まれて4歳までお隣の関谷で過ごし、横浜市内に越してから今はなき「横浜ドリームランド」へ連れて行ってもらったのが、幼少期の一番のお楽しみでした。この地に赴任したことに縁を感じています。小雀の子たちが“満足の花”をたくさん咲かせることができるよう、全力で支援して参りますので、どうぞよろしく願いいたします。